

丸山文裕先生のお人柄

—泰然とした研究者—

東京工業大学理事・副学長・事務局長

芝田 政之

1. 丸山先生との出会い

丸山先生と初めて出会ったのは2006年1月に私が国立大学財務・経営センターに着任したときである。それまで論文などで先生の書かれたものを読む機会があり、社会学者としてのトレーニングをしっかりと受けられた研究者だろうと想像していたが、直接会ってみて失礼ながらなんと茫洋とした方だろうという第一印象を持った。その後、約2年半にわたりお付き合いしてみてこの印象は良い意味で正しかったと思っている。丸山先生は些細な物事に動じない大らかさと、誰でも和ませる包容力の持ち主だった。

国立大学財務・経営センターの研究部は全部で4人の卓越した研究者で構成されていた。わずか4人の小さな世帯ながら国立大学の法人化に伴う変革の時期に国立大学法人を社会科学的な分析の対象として新領域を切り開く見事な仕事をされた。しかし、わずか4人という環境であったため、お一人お一人の研究者にかかる負荷は想像を絶するほどであった。実際、4人の内お二人は土日も必ず出勤されていた。そんな中で丸山先生の鷹揚な振る舞いは、センターにとって大変貴重なバランサーになっていたように思う。もちろん丸山先生への負荷も他の先生方に劣らず大きかったはずであるが、それをやわらかな蔭で包み込みながらセンター研究部の業績に多大な貢献をされた。

残念ながら先生の生い立ちを詳しく聞く機会はなかったが、いわゆる大変育ちの良い方だからこの鷹揚さではないかと勝手に想像している。

2. 開かれた研究の地平

丸山先生は高等教育研究の中でも決して蜻蛉壺に入り込むことなく、幅広い領域を対象に研究されてきている。高等教育の投資論、財政問題、大学内の財務問題、教育の機会均等とその地平は大きく広がっている。その姿勢はミシガン州立大学で社会科学に臨む基本的考え方を身につけられたからではないかと思う。博士の学位を取得するのに必要以上の苦勞を強いる日本の社会科学系大学院では、あのような姿勢は身につけにくいのではないだろうか。アメリカ流の大学院教育で研究者としてのキャリアを歩むのに必要な俯瞰力と分析力を養われたのだと理解している。そしてこのような姿勢は先生の鷹揚さ、包容力ともよくマッチしていたのだろう。

国立大学財務・経営センターに奉職される前、約15年間私立椋山女学園大学に勤務されていたこともあり、丸山先生の高教育研究における私学関連研究は早くから数々の果実を実らせていた。

国立大学の法人化は、国立大学を国の各種規制から解放し競争を導入することで充実を図ろうとする政策であり、高等教育の市場化の流れに即したものである。このような国立大学の法人化そしてその後の国立大学政策、財務、経営などを研究するに際しては、当然私立大学の分析手法が応用可能である。振り返ってみると、丸山先生の国立大学財務・経営センターへの異動は必然の動きであったと見ることができる。

同センターに移られてからの丸山先生は、国立大学が法人化を準備する上で必要となる情報の収集分析、法人化前後の大学の経営状況、財政政策、財務分析等々多方面で大きな業績をあげられた。もともと丸山先生のご関心は高等教育全般を視野に入れる幅広い地平を有するものであったが、ここに至って国立大学という新しい研究対象の鉱脈にたどり着かれたわけである。

実際、国立大学の法人化前後に丸山先生と同僚の先生方が中心となり国立大学財務・経営センターが刊行した多くの報告や論文は研究者のみならず文部科学省関係者、国立大学関係者にとっても貴重な参照資料となっている。「英国における大学経営の指針」（2003年）、「英国における大学経営の指針（続）」（2004年）、「国立大学における資金の獲得・配分・利用状況に関する総合研究」（2005年）、「国立大学法人の財務・経営の実態に関する全国調査」（2006年）、「国立大学法人化後の財務・経営に関する研究」（2007年）、「国立大学法人における授業料と基盤的教育研究経費に関する研究」（2009年）など、法人化から12年を経た今日でも国立大学研究の主要参照論文・報告としての光を失っていない。

丸山先生の大きな業績を語るのに急いで付け加えなければならないのは、国際比較研究である。ここに先生の地平のもう一つの広がりがある。もともと米国の大学で学位を取得されたことから米国の高等教育政策に深い見識を有しておられる。これに加え、先生の暖かい包容力は幅広い外国人研究者との交流をもたらし海外の高等教育への関心が広がっていったと思われる。ほんの一例であるが、OECDの会議でたまたま同席され知り合ったというフィンランド・タンペレ大学の研究者ティモ・アレバラ氏とは特に深く親交された。同氏は丸山先生の招待で2006年に3ヶ月ほど国立大学財務・経営センターに客員研究員として滞在し共同研究を行われた。このご縁で、翌年にはセンターの研究者がフィンランドを訪問し合同のシンポジウムを開催した。その際アレバラ氏は丸山先生にフィンランドの自然と文化を堪能していただきたいと準備をされていたのだろう。大変心のこもったもてなしが印象的だった。そのときの成果は「University Reform in Finland and Japan (Higher Education Finance and Management)」（2008年、丸山・アレバラ編著）として刊行された。その後も、2011年には東京でシンポジウム「フィンランドと日本の大学改革」が開催されるなど、継続的な研究交流につながった。

この他にも多くの研究者が丸山先生との交流のご縁で日本を訪れシンポジウムなどに参加された。そうした国際交流を通じて蓄積された成果は先生の多くの国際比較研究の論文に結実している。誰とでも友人になれるうえ、英語が堪能な丸山先生の面目躍如たるどころだ。

国立大学財務・経営センターは行政改革の対象法人となり、業務の見直しや廃止の議論が繰り返され2012年には研究業務が廃止となったが、この間丸山先生が動揺された様子を見せられたことは一度もない。常に泰然と構えておられたことを最後に記しておきたい。